

話し合い

上谷 氏原さんどうもありがとうございました。6人の発表について、いろいろな要点をまとめていただきました。今のお話の中にもありましたけれども、教師の問題として、それから実際に音声言語教育で何をやるのか、そこに関わったお話に焦点が当てられればいいのかと思います。それからもう一つ、私自身お聞きしていて思いましたのは、日本語教育でも国語教育でも実際の授業の現場において音声言語教育が関わってきますので、一番いろいろな方面に関わってくるのが音声言語教育の振興なのだと思っていて、午前から参加してくださった皆さん方のいろいろなご意見を伺いたいと思います。

それからもう一言添えますと、今6人の方にお話いただきましたけれども話し合いの最後の方で一人約3分ほど再びコメントをいただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。また、話し合いの中でも今お話ししていなかったことなど出していただければ幸いです。それでは話し合いの方に入りますけれども、盛りだくさんで6人の方にお話を伺いましたので、まずそれぞれの発表者に対する質問などがございましたらお聞きして、それから特に教師の問題、これはどういう分野においてもそうですが、どのような教員のあり方または教材の捉え方ということになるかもしれませんが、そういった問題を掲げていきたいと思います。質問等ございましたら、よろしく願いいたします。

音声言語教育における具体的な話し手・聞き手像

寺井 教師の問題、あるいはなぜ音声言語教育が不振だったかということを考える際に、どうしても考えなければならないことは、国語教育に携わる私たちがどのような話し手像・聞き手像をイメージしているのかという問題です。話し手像・聞き手像、ここではコミュニケ-ション人像ともいえるかと思いますが、どのようなコミュニケ-ション人像をイメージするのか、という問題を考えることが大切だと思います。

先ほど小森さんの方よりお話がありました、音声言語で問題を解決する子ども像というようなものを、具体的にもう少し話し合えたらありがたいと思います。音声言語で問題を解決していくような話し手像なのか、あるいは、一緒に生きる人々と円滑に人間関係を築いていくような話し手像なのか。他にもいろいろな話し手像を教えることができると思います。例えば、社会科で最近ディベートが非常に盛んですが、ディベートだと非常に攻撃的な話し合いで自分の意見を成立させるような話し手像がイメージされます。また、先ほど関口さんよりお話がありました、外国人子弟も含めた学習者像を築いていくべきだとすれば、日本人・外国人子弟、あるいは帰国子女を含めた上での話し手像というのはどのようなものになるのでしょうか。つまり、音声言語教育が不振であるのは、これからの日本人の話し手像というものが具体的でないから、音声言語教育をどのように展開させていくのかが分からないのではないかと思うのです。以上申し上げたコミュニケ-ション人像について話し合いの中で触れていただければありがたいと存じます。

上谷 ありがとうございました。質問として今お受けしましたけれども、他に要望などがありましたら、お聞きしたいと思います。それでは寺井さんより出していただきました音声言語教育

の具体的な話し手像、コミュニケーション人像というようなことを具体的に考えていきたいので、それぞれの領域の方に聞いてみたいということでした。

このような順番でいかがでしょうか。まず、お名前が出ましたので、小森さんの方より先ほどの子ども観、学習者観に関して、より具体的な像を出していただくということ、それから関口さんの方で、日本語教育において先ほど国語教育への要望なども出されていましたが、今寺井さんがご質問なさいました具体的な話し手像や何か要望などがありましたら、お話しいただければと思います。それからディベートということが出まして、今日はやはりそういう話題も出るのではないかと思ったのですが、最初の問題提起の甲斐雄一郎さんの話が途中だったということもありまして、ご提案されている活動の分類中の話し合いのところディベートなどが例えばどのような形で位置付けられ、そこでもし、今寺井さんのお話にありました、話し手像などがありましたら付け加えていただければと思います。以上小森さん、関口さん、甲斐さんの方をお願いできるかと思えます。よろしくお願ひいたします。

音声言語教育における目標設定の必要性

小森 私が生上げたかったことは、甲斐雄一郎さんのご提案をどう受けとめるかということに関わっての意見なのです。ですからここに12種類の形態が見られますけれども、私が懸念することはこのように領域に分け、話し方・聞き方ということを出してしまいますと、どんな資質や能力を目指すのかという目標がはっきりしない。話し方・聞き方が形や方法論になってしまうことを恐れるのです。ですからコミュニケーション能力といい、ディベートの能力といい、それを大きく捉えた音声言語で問題を解決していく表現力・理解力という目標設定が必要ではないか。ところが従来の国語科は国語を正確に理解し、適切に表現するという目標設定であり、何が適切なのか、何が正確なのかははっきりしない。そこでもう一步具体的に進めて、その資質や能力としてのタ-ゲットをもう少し鮮明に打ち出そうということで、問題解決的な能力というふうに表現したわけです。ですからこれから具体的には学習指導要領でその体系的な示し方を考えるのが次の作業かと考えております。以上です。

上谷 ありがとうございます。今のご意見は甲斐雄一郎さんの提案に関わっておりますので、あわせて後でよろしくお願ひいたします。

国語科で国際理解教育を

関口 今寺井さんの方からお話がありましたように、具体的には「国際級」とか「引っ付き教育」、「取り出し教育」などの方法は、現状でそうしなければ解決できないということで行なっている外国人児童生徒への取り組みだと思えます。

しかし、これからの方向として、最終的には先ほど申し上げましたように、日本人の児童生徒にとっても、共に生きている外国人児童生徒と共に学習する時間というものを国語科の中で、国語という教科の中で作ってみてはどうでしょうか。その中で、今お話にありましたようにコミュニケーション能力を高めるためにも、日本語力が自分たちと同じではない人に対してどうしたら自分の言いたいことが分かってもらえるかということ、母語話者である日本人の子どもたちが

考えるという学習が必要ではないでしょうか。それがきちんとできるかということではなく、そういう視点をもって考える教師であり、子どもであることが大切だと思うのです。

これは国際級の先生、あるいは外国人児童生徒の担任の先生方が相当苦労され、苦しんでいらっしゃるテ - マであると思います。実際に今教科学習と日本語のダブルパンチの中であえている子どもたちをどの程度周囲の子どもたちが理解しているか、あるいは理解しようとしているかという問題に、大人の存在、特に教師の存在は大きく関わってくると思います。もし、国語科の中で、あるいは指導要領の中で取りあげられたら本当の意味の国際人が育っていくと思います。

母語話者である日本人の子どもたちのコミュニケーション能力を高めるためにも、また、普段使っている音声言語としての日本語をより洗練させるためにも、ぜひ取り入れてほしいと思います。自分たちと違う文化とか習慣というものが存在し、それは教えてもらって初めて分かるということで、お互いが授業の中でインタ - アクションも活発に行なえると思います。私は今このように考えております。

それから一般的に日本語教育の場合には、ちょうど今、国語教育の中で問題になっていることと逆の形でスタ - トしているわけです。まず、「聞く」「話す」からスタ - トして、「読む」「書く」というところに積み上げていく形、あるいは同時進行の形で行なっているわけですので、その辺もノウハウの面でお互いに協力し合えることが沢山あるのではないかと思います。

上谷 ありがとうございます。続けて甲斐さんにお話しいただきます。

合意形成能力と共生の作法を身につけた理想的な学習者像

甲斐ユ 私の方では非常に抽象的なことばになってしまうかもしれませんが、大きくくりますと合意形成能力を身につけた学習者、つまり音声言語の諸活動を通じて仲間内で、あるいは非常に広い意味での仲間同士、あるいは社会で合意を形成していくことができるような力を身につけた学習者を一つの理想像としています。

それからもう一つは合意を形成しようというような努力をしても、どうしても形成できないことがあるわけです。どうしても分かり合えないとか、分かってもらうまいかない。それにも関わらず、その友達を友達として認めたいということを願うとするならば、歯の浮くようなことばですけどもそれを「共生の作法」というふうと呼ぶとします。その共生の作法を身につけた子ども像を漠然とは意識しております。

上谷 ありがとうございます。以上3人の方に寺井さんからのご質問にお答えしていただく形でお話しいただきました。

寺井 大変ありがたいお答えをいただいたと思います。例えば、神戸の震災の時にお互いがいたわり合ったようなことばがけというのがことばの力であるとするならば、それを国語教育は今のところ教科の中ではあまり取り入れていないのではないかと思います。そういうことが出来る子ども像というのも大切なコミュニケーション人像だと思います。その意味で、大変ありがたいお答えをいただきました。

上谷 具体的な話し手像ということで、寺井さんのご質問に答えていただく形で、いろいろお話を伺いましたけれども、関連してでも他のことでもいいのですが、上野さんお願いいたします。

聞く姿勢の養成を

上野 普通話し手が話をする場合には聞き手がいることが前提なわけですが、話をするよりも聞く方がずっと難しいと思います。そしてずっと疲れることだと思います。良い聞き手になるということは同意はできなくても相手を理解することだと思います。先ほど日本語教育では相手の言っていることが分からなくてもそれを理解しようとする、という姿勢が必要だということができましたけれども、別に日本語教育でなくても同じ日本人同士でもその話す・聞くということにおいて、聞くということはとても難しいことだと私は思います。

そして話す方は一方的に話してしまって、それで終わるということができるとは思いますが、本当に相手を理解するという、聞くというこの姿勢は小さい時から身につける必要があると思っております。そのことによって初めて相手の話していることに呼応して、こちらの意見も出てくることになるのではないかと思います。実際の教室活動の中で教師は絶えず話をしているというのが学校生活だと思うのですが、そういった話の中で相手の聞く姿勢をどういうふうに養えるか、それからまた、学習者の話をどう教師が受け止めていくか、この辺りを考えていくことで実践の中で話す・聞くということが具体的に指導できるのではないかと思いますがいかがでしょうか。

価値観の異なる人を説得する能力の必要性

上谷 特に聞くということに注目してご意見を伺ったのですが、手が挙がりましたので岩見さん、よろしくお願いたします。

岩見 今までのお話を伺って思ったのですが、音声言語教育を活発にする一つの方法として、人は均質ではないのだ、それぞれ違うのだ、あるいは極端に言えば恐ろしい人が隣りにいるとか悪いことが起こっている社会があるとか、そういう何か個性、異質なものを認め合う姿勢、異質なものがあるという認識に立たないと、なかなか話しことばが活発にならないのではないかとこのように思います。

先ほどのご意見で実践の場を設け体験させるといってもどうやって実践するかということ、そういう場を設定することは教室の中だけではなかなか難しいことかと思っております。この企業のアンケートを見ますと、短期間に企業の中で一つの目的に向かっていく時に、いろいろな人間がいる中でそれをまとめあげていく、あるいは一人のやった仕事を他にも説明・説得していくといった時には、必ずしも話しことばを手段とせずとも、文書でも行ないますが、手っ取り早く話しことばによって伝える、表現するということがかなり必要になってくるわけです。そういう実践の場がありませんと、皆同じ考えで仲良くするのだという目標だけではとても活発にならないのではないかと気がいたしました。特に、知らない人に助けを求め、違った考えの人を説得し、自己を実現させ生きていくということがこれからの日本社会で必要な能力であると思います。恐らく現実には価値観の違う日本人がいろいろ住んでいるわけです。その中でその違いを伏せて、みな同じ考えだということに、仲良くしていこうという社会観が一方にありますけれども、それだけでは話しことばの振興に少しマイナス面があるのではないかとこのように思います。

上谷 ありがとうございます。今岩見さんから人は異質なものだということ、そういう見方の上

でのコミュニケ - ションの難しさを考えなければというご意見がありましたけれども、今のことについてご意見がある方はまた伺いたいのですけれども、その前に先ほど寺井さんから神戸の震災の時の親和力に関わるようなお話がありましたので、後で浜本さんにそれに関して、もしありましたら、加えていただきたいと思います。

それから上野さんからの聞く方が難しいということにつきましては、ちょうど中瀬さんが聞くということについていろいろ書いていらっしゃると思いますので、もしこのことに関してありましたらお話しいただきたいと思います。それから今の岩見さんのところではちょうど杉本さんが紹介されたアンケ - トや事業に関わったものについてお話がありましたので、また後で何かありましたらお願いしたいと思います。

岩見さんのご発言は異文化間のコミュニケ - ションにも通じると想像されるのですが、前のセッションのまとめで吉野さんが時間がなくてその点をお話なさらなかったことがあったと思いき、異文化間コミュニケ - ションについて今のお話に関連したことがありましたらお話しただけないでしょうか。

異文化間コミュニケーション能力とは

吉野 異文化間コミュニケ - ション能力というのはいろいろな捉え方があると思うのですが、言語に関する知識だけではなくてやはり自分と違った考え方とか異文化を持った人とのようにコミュニケ - ションしていくのか、具体的なことばの操り方という側面もありますし、それからその背景となっている社会的な物事の進め方であるとか、どのような価値を大切にするかというようなことにも関わっていくと考えられます。ですからどの部分もお互いに密接に絡み合っていますので、どこか一つを取り出してそれだけを論じるのは難しい問題だと思います。突き詰めていくと、その中のどの価値を一番大切にするかということがもしかしたら引っ張り合いといえますか、誰かがあることを我慢しなければいけないというようなことになってくると思います。それを衝突に向かっていくのではなくて、それを解決していくための力というものが一番大切なのではと感じています。

異質なものへの「気づき」の経験

一つ例を挙げますと、大学にはチュ - タ - 制度といって留学生が日本の大学の授業や生活に慣れるまで日本人学生がチュ - タ - としてお手伝いをする制度があります。このチュ - タ - と留学生は1年~2年間、1対1で個人的に関わりを持つこととなります。日本人学生、留学生にそれぞれ、チュ - タ - の実施状況について反省会をすると、チュ - タ - 側からは「留学生の一言で傷つくことがあった」「相手が言ってくれないから何をしたらいいのかわからなかった」というようなことが出てきます。留学生の側も「なかなか連絡してくれない」と文句を言うケ - スがあります。

ここで重要なのは、相手について判断を下してしまう前に、自分から相手に歩み寄ることだと思います。私は、積極的に相手に働き掛け、ことばで表現することによって自分を理解させる、誤解を解く、そういう態度を養いたいと思って指導をしています。

また、チュ・タ・になることは、多くの日本人学生にとって、自分とは違うコミュニケ・ションの仕方をする人と初めて個人的に付き合わなければならない経験、すなわち岩見さんのおっしゃった異質なものへの「気づき」になるわけです。大学以前の教育の中でも子どもたちにこのような「気づき」を経験させることはできるのではないかと、そしてそれは、音声言語で他人とコミュニケ・ションするための土台の一つになるのではないかと考えます。

上谷 こちらからのご指名で申し訳ありませんでしたけれども、異文化間コミュニケ・ションということで、特に価値問題、それについて引っ張り合いが行われている時の我慢なども含めた、そういう意味ではやはりどうしても問題になるところを、ご指摘いただいたかと思います。他の方で今出たことに関して、またそれ以外のことでもかまいませんけれども、ご意見がありましたらお願いしたいと思います。

異質な他者と共存するための前提

二谷 先ほど「異質な他者との共存」というお話がありましたけれども、やはり日本の国際理解教育というのは過去を振り返っていきますと、どうしても同化的な理解の方が日本の教育の持っている資質にありますので、今、国際化という時にはやはり観点を少し変えないといけないというふうに思っております。これは社会科教育の課題でもあるわけなのですが、やはり「異質な他者との共存」と言った時に、今、価値観の衝突、争奪ということが出てきましたけれども、その大前提のところ簡単にお互いに理解し合えるというふうに思い込んでしまっているところがマイナスなのだろうと思うのです。ですから極端に言えば理解し合えないことを前提にして、理解し合うという非常に矛盾した言い方なのですが、そういった形の国際理解の仕方をしていかないととても異質な他者との共存というのは成り立ち得ないのではないかと、と思います。

そこで午前中にも少し申し上げたのですけれども、どうしても克服していかなければならない問題は、日本、日本語もそうでしょうし、日本史もそうなのですが非常に固定的な形で単一的な、均質な、あるいは画一的な教育をやっている限りは、なかなか異質との共存という道に開けていきません。そこで、文化も含めた国際理解ということで、簡単には理解し合えないことを前提にしながら理解し合っていくという姿勢をどうやって作っていくかというのが、ことばにおいても恐らく必要なのではないかと、思うのですけれども。

上谷 どうもありがとうございました。今のお話は先ほど甲斐雄一郎さんが合意形成能力を身につけた子どもという像を挙げられましたので、後でもし時間がありましたら触れていただきたいと思います。

先ほど 60 分ほどずっとお話を聞くという時間になってしまったこともありまして、残り時間がだいぶ少なくなってまいりました。各発表者 6 名の方にもまたコメントをいただくということもありまして、そろそろ話し合い自体を打ち切らなければいけないのですけれども、今回のチーム部長でいらっしゃる甲斐睦朗さんにもお話をいただければと思います。よろしくお願いたします。

発信型話しことば能力の育成を

甲斐ム 実はこの研究班4は「情報発信の」というテ - マになっておりまして、従って日本人の話しことば能力を発信型にもっていきこうということがテーマであります。そこでは小森さんの問題解決もありますがそれだけではないのです。やはり柳沢さんが言われたような、挨拶のことばを掛けるといったような人間関係を作ることもあるかと思えます。

私は今研究所のテ - マとしては授業の発話分析ということをやっておりますけれども、一度大きな壁にぶつかったのです。それは教師と生徒、学習者の会話というのがありますが、教師という存在は学校教育においては絶対的な権力を持っておりまして、学習者に対して問いかけをすると学習者は受け答えをする、というそのような人間関係であります。ですから学習者はまともな文型で答えることもできない。あるいは例えば他の学習者がものを言っている時には話し手の顔を見て聞きましょう、ということは強制されるけれども、またうなづくことは強制されるけれども、相づちを打つことは禁止されている。そういうような教室における話しことばに関する暗黙のル - ルというのが一杯ありまして、これをある程度明るみに出していけないと、「発信型の話しことば能力」というところに行きにくいのではないかということ最近考えているのであります。

従って先ほど小森さんのおっしゃった学習者の方からの問題解決は本当にいいと思うのですが、教師が問題を投げかけると分かった子どもが答えるという形から、逆に学習者の方から問題を投げかけて自分で考えていくというためには、授業の学習の目標というものを学習者が作っていく。例えば教師があるテ - マを出してもそれは僕は面白くないからこういうテ - マでやりたいというようなことを今の教室で言って欲しいわけですが、言ったとするとたぶん叱られるのです。それから難語句の意味に関する質問をしても叱られる、なぜ家でしてこなかったのかと。そのようなところ辺りを取りたて指導で解決できる部分として我々は目をつけていかなければいけないのではないかと思えます。

上谷 ありがとうございます。今の、教室における教師と学習者との関係ということにつきましては、私自身も関心を持っております。

それでは残り時間も迫ってまいりましたので、先ほどお話しいただいた6名の方々に約3分ほど短い時間になりますけれども、今話し合いの中に出てきたことなども含めまして、補足のお話をさせていただきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

まずは問題提起者の甲斐雄一郎さんからお願いいたします。

異質な他者とのコミュニケーションは可能か

甲斐ユ 簡単に理解し合えないことを前提にしなければ、話しことばの教育というのは不可能なのではないか、というふうな提言がありまして、本当にその通りだと思えました。浜本さんの提言の中に「実の場」を準備すること、というのがありましたけれども「実の場」というのは、現実の教室の中で可能な「異質な他者」というものを作り上げる唯一の方法ではないか、というふうに考えています。

けれども現在、とりわけ中等教育において抱え込んでいる問題は、「本物の他者」が激増していることではないかと思うのです。要するに先ほど甲斐さんがおっしゃったように先生が話し掛けたら子どもが答えるというような仕組みが全く成り立たない教室というのが中学校などで増え

ている。それは旧来の教育というものに馴染んだ我々からすれば、本当に異質な他者ということですが、そういう人たちとどのようにコミュニケーションを図っていくことが可能なのか。またそもそもそれは図り得るものか、ということについては現状では少なくとも国語教育研究の文脈では呆然としているところがあるように思います。ですからその事態を受けて一体何をどうしたら良いのか、ということについては私自身の課題として考えていきたいと思っております。

音声言語指導教材

それからこのような話し合いの中で十分に突き詰めることは出来ませんが、私自身が関心を持ったのは、杉本さんのお話の中でNHKの講習ではテキストを作ってもらいたいという要望があるけれども、それは作ることができない。実践の中で身につけていくしかない、というようなことをおっしゃっていました。それは昭和20年代に西尾実が主張していたことと実は全く同じことだというふうに私は理解しております。にも関わらず、現在の多くの国語の授業では特に教科書に依存した授業が進行しているものですから、教科書に掲載されている音声言語指導のための教材というものが現実の音声言語の根拠になっている。それが果たして今どの程度意味を持っているのか、それなくしては音声言語の単元は不可能なのか。それともそれがあるからこそこのような実りの深い単元が展開できていると言えるのか、そのようなことについての評価を多くの人たちが行なっていく作業が必要になってくるのではないかと思いました。以上です。

上谷 ありがとうございます。それでは続きまして小森さんよろしくお願いたします。

音声言語指導の留意点

小森 とても貴重なご意見を頂き、私も感謝の思いでいっぱいでございます。私は二つほど強調したいと思います。甲斐さんが「合意形成能力の育成」それから「共生の作法」ということばを使いました。寺井さんの方からもそういったコミュニケーション能力としての音声言語の力というのがありました。私はやはりどんな資質や能力を付けるかによって方法とか内容とかは工夫すべきものだと思います。それは杉本さんのご発表で具体的になったと思うのです。筋道立てて意見を述べる力が求められるとなると、それにふさわしい中洲さんの内容論、浜本さんの方法論が用意されている、というふうになってくると思います。

二つ目はやはり学習者というのは氏原さんのお嬢さんの例ではありませんけれども、「AからBを引く」ということにこだわればこだわるほど、いろいろなことが考えられる存在である。私は有能な学び手として、しかも自分との関わりで相手を理解していくということが音声言語の指導ではとても大切なのではないかと考えています。以上です。

上谷 ありがとうございます。それでは中洲さん、ご助言お願いたします。

日本語の慣用語句の問題

中洲 話し手像、聞き手像、それから聞くことに関しましては資料に、一応「基礎・基本」という形で書いてございますので、このことは重ねては述べないことにいたします。それで今ま

で話題にしなかったことだけ一つ加えたいと思います。これはもう既に解決されている問題なのかどうかということなのですが、日本語の慣用語句の問題なのです。先ほど里芋の「衣かつぎ」というのが出ましたけれども、日本人のそのような物事の捉え方は、何か比喩というかイメ - ジで捉えています。例えば、問題にしています話しことばの世界で言いましても、沢山の慣用語句があります。

一、二挙げてみますと「奥歯に物の挟まったような言い方」というのがありますが、それに対して「歯に衣を着せない」と言います。それは非常に比喩的な表現です。ある意味では文学的表現と言ってもいいのですが、論理的表現が大事にされてきているということになってきますと、この「奥歯に物が挟まる」とか「歯に衣を着せない」というような言い方は、例えば「率直な言い方」とか「明確な発言」などと言う方がいいのでしょうか。つまり、一方で私たちは話しことばを豊かなものにするという点で慣用語句はしっかり身に付けさせたいという思いがあります。しかし、これは多用しますと、場合によっては先ほどの関口さんのお話ですけど、相手のことを考えますと、もしかしたらそういう言い方をすることによって捉え切れなくなってくる場合があるのではないかと、ということがあります。

この問題については、先ほど出ました「等しい」と「同じ」みたいなものですが、表現がいろいろあるということは豊かであるということになります。一方それがあるために返って論理的ではなくなるということがあるとする、国内で方言と共通語の問題がありますように、国際化の中での日本語という点では慣用語句などはやはり方言の方に入るのでしょうか。これを問題提起として、私の付け足しを終わりたいと思います。

上谷 ありがとうございます。では、杉本さん続いてお願いいたします。

いい聞き手がいい話し手を育てる

杉本 「聞く」ということについてご意見がありました。私も少し触れてみたいと思います。滅多にありませんが、もし「あなたは『話す』ことと『聞く』ことと、どちらが好きですか」と質問されたら、私は即座に「聞くことです」と答えます。「聞く」ことに非常に強い関心を持っていて、好きなのです。というのは、数年前に、話しことば教育の実際を放送しようと、川崎市の下沼部小学校にロケに行きました。2年生の授業を取材したあと、同僚が女の子にインタビューをしたのです。「あなたは、『話す』ことと『聞く』こととどちらが好きですか」という質問に「はい、聞くことが好きです」と答えてくれました。続いての「どうしてですか」という質問の答えに感激しました。

「私が一生懸命聞いてあげると、話している人がとても楽しそうになるからです。」彼女のこの一言を聞いて、私は聞くことの大切さを痛感し、それ以来聞くことに関心を持ち続けているのです。彼女は、「聞くことは、聞き手のためだけにあるのではなく、いい聞き手がいい話し手を育てる」と、語ってくれたのです。聞くことによって、お互いに理解し合い、聞き手はもちろん話し手も成長するということです。

「聞く」ことは、受動的に考えられがちです。しかし、自分も考え、相手も変える、非常に能動的な働きをする作業だと言えるのではないのでしょうか。むしろ「聞く」ことがあって初めて「話す」ことが成立するのかも知れません。その教室の黒板の横に、「人の話は一生懸命聞きましょ

う」というポスト - が、しっかり貼ってありました。

先ほどの「分かりやすく」ということを話し手の立場で考えてみました。十人十色というように、話し手と聞き手は、それぞれの見方や考え方を持って、表現し聞き取っていきます。表現するフィルタ - も、聞き取るフィルタ - もみな違っているのです。そうしたことを意識しないで、話し手は、話し手の勝手に表現してしまいます。聞き手は、聞き手の都合で聞いています。そのような状態でコミュニケーションが成立するのでしょうか。「分かり合う」ということは、単に話し手だけの責任ではなく、聞き手が一生懸命聞いているかどうかが大切で、そうした話し手と聞き手の協力がなければ、コミュニケーションは成立しないと思います。まさに貴重なご意見のあった「異質な他者との共存」がコミュニケーションだと思います。

でも、いまデジタル社会になって、人と人が直接話し合う機会が少なくなりました。コンピュータに向かっているのですから、別に相手意識を持たなくても済む時代です。「話す」機会も少なくなると同時に、「聞く」機会も少なくなっています。能動的な働きを持つ「聞く」ことについての教育が、大変に貴重な意味を持っているのではないかと思います。

上谷 ありがとうございます。では浜本さんお願いいたします。

音声言語教育振興のための4つの提言

浜本 短い時間ですが4つほど申し上げたいと思います。ことばの歴史を見ると、話しことばの時代から始まって次に近代の活字言語の時代に入り、現在は電子メディアの時代に入っていると思います。活字言語は一方通行のコミュニケーションですけれども、電子メディアの時代になると即時性の双方向が可能なインタ - ネット。そうするともう一度インタ - ネットを通じた話しことばの機能をそちらからも見直さなければいけないのではないかと。双方向で即時性というインタ - ネットの機能というものに国語教育が備えなければならないのではないかとということが一つ。

二つ目ですが、これは神戸の例で確かにあの地震の後には非常に異様な親和力のある空間、人間が裸になればお互いにことばを掛け合うのだなという思いがしました。今も仮設住宅に住んでいる人々が声を掛け合うことによって、死から免れるというようなことが言われますけれども、今神戸では声を掛け合おうということが何か流行りことばになっている。そういう意味で見知らぬ人、あるいは恐い外国人でもエレベ - タなどで出会ったら、「Hello!」などと声を掛け合うという動きが震災の中から沸き上がっています。これは非常にいいことだと私は思っています。

それから三つ目ですが、「教師の研修」についてですが、それは杉本さんが言われた通りなのです。私は話しことばの場合、教師という立場にある人がどうしたらよろしいですかと聞くような問題かと思うのです。教師のレベルでしたら、むしろお互いが上手になろう、3分間なら3分間で話そう、というように少し気を付ければ上手になることが非常に多いから、教師が教えてくださいとNHKへ行って、NHKの人がそれに答えましょう、というふうなシステムを教師の方から断った方がいいかという気もするのです。教師の心掛けをもっと考えたいと思います。

それから四つ目ですが、ディベ - トで攻撃的な人間を育てるという形では欠陥があるので、ディベ - トは育ちにくいのではないかとこの一年間国語教育の現場を歩いて反省しています。むしろ日本的な話しことばである、応用力のある話し方・聞き方ということを実は生かしていく必要があるのではないかと。「あなたはそういう考え方ですね。」と一旦受け入れた上で「も

う一つこういうふう考えたらどうでしょう。」と京都の人がよくやるのです。このように、全部受け入れたふうをして、一つ付け足して自分の意見を通すというような包容力のある話し方で、攻撃的に一もだめ、二もだめ三もだめというディベート式でなくて、日本人の話し合いの包容力、包摂力のある話し合いの能力をもっと見直して、国際社会の中に生きる、理解し合える人間を育てるといふようなことも必要なのではないかと思います。

上谷 ありがとうございました。それでは最後の氏原さんです。先ほどのまとめていただきましたところのご自身のご意見なども出していただいで、よろしくお願ひいたします。

習得すべき点を子どもたちに納得させる指導を

氏原 それでは二点ほど申し上げたいと思います。一点目は今いろいろなご意見が出ていたのですが、根本的というか、非常にレベルの低い話で恐縮なのですが、私は高等学校に14年ほどいたわけですが、その中で子どもたちは話しことばについては当然しゃべれるのだ、いったい何を勉強するのだという思いが非常に強いのです。そして先ほど少し述べましたように、教員の方も話しことばというのは自然習得出来るのではないかと思っている方が多い。ところが実際には先ほどの杉本さんのアンケートにあったように、一番の問題点となっているのは「筋道立てて意見を述べられない」というのが151。そして、「要するに何が言いたいのかわからない」というのが144もあるのです。これが中学や高等学校、あるいは大学を卒業して企業に入ってきて研修を受けている人たちの現状だとすれば、やはりまず話しことばというのは、「自然習得されるという部分」と「意図的に自分の考えをきちっと音声に乗せてしゃべっていく、すなわち学習しなければ習得が難しい部分」とがあることをきちんと子どもたちに納得するように分らせる。そのことがまず指導の第一歩ではないか、ということです。

先ほどの音声言語教育の領域論と関わるのですが、「音声言語」といふふうの一つにまとめてしまうと、そういったところが見えてこない。「音声言語」といっても様々なレベルのものがあるわけです。今、皆さんがしゃべっているようなことばは、どちらかといえば書きことばに近いわけです。きちんと主語・述語が明確になっていて、ご自分の考えがきちんと述べられている。子どもたちの「あれどうするの」とか「それはどうの」という日常的な話しことばとは違うレベルでのことばを使っているわけです。ですから同じ話しことばということであっても、そういったものは実は自然習得では難しいのだと。その自然習得の結果が「何を言っているのかさっぱり訳が分からない」という現実になっています。もう少し子どもたちに納得してもらって、そこから進めたいというのが一点目です。

音声言語教育の視点で国語の授業の再構築を

もう一点は、国語の授業全てを音声言語教育の視点で再構築する、もう一度見直したらどうかと思うのです。つまり音声言語教育というふうになにか構えて特別なことがあるんだというのではなくて、先ほど随分話の中に出てきましたけれども、我々が行う読解指導であっても作文指導であっても、子どもたちにことばを使って説明したり、あるいはことばを使って動機付けをしていく。そして何か子どもたちに説明する時に、どういう説明の仕方が分かりやすいのかとか、あるいは

A、B、C、Dという4つの要素があった時にA、B、C、Dの順で話した方が分かりやすいのか、Bを先に言って、それからC、Dというような言い方がいいのかとか、子どもの立場に立った時にどういう説明の仕方があり得るのかとか、そういう意味で音声言語的な材料と言いますか、そういったものが日常の授業の中で沢山あるのではないかと。これは子どもたちの顔を見ていれば、教員としてしゃべっていることばが本当に入っているのか、入っていないのかはやはり分かるわけです。

ですから、そういう意味では何か特別なことをやるのではなくて、もし分かっていないとすれば、あるいはいろいろな要素が絡んできまして、声が良く聞こえないということであればまた別の問題になるわけですが、仮に声が聞こえていても、それが果たして本当に子どもたちの能力と結びついて彼らの理解を支援しているのかどうかという問題があるわけです。そして日常的に聞く力を育てていくためにはやはり教員のことばが子どもたちにきちんと届くということが必要なのではないかと。やはり聞くという姿勢を作らせるためには話し手の方が聞くに値するような、あるいはよく聞いていけば分かるような内容を常に意識して子どもたちに話していかないと、実際問題としてはなかなか難しいわけです。ですから、そういう意味で本当に基礎的というか、レベルの低い話なのですが、そういったものを大事にしたいということをお話ししまして私の意見としたいと思います。